

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：32636

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12425

研究課題名(和文) 地域協働型介護予防・健康教育介入プログラムの効果検証 社会人基礎力の発達との関係

研究課題名(英文) Verification of the Effectiveness of a Community Collaborative Nursing Care Prevention and Health Education Intervention Program Relationship with the Development of Basic Social Skills

研究代表者

村松 由紀 (MURAMATSU, Yuki)

大東文化大学・スポーツ健康科学部・教授

研究者番号：10348097

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：アクションリサーチ介入から同地域に生きる学生と高齢者が共に学びあう教育プログラム作成とその活動から学生の社会人基礎力への関係を探索した。大学生と65歳以上近隣在住者を編成、数か月おきに講義・グループワーク、フィールドワーク等から相互理解・信頼関係形成、地域特性理解、加齢変化理解等を学修し、併せて経産省提唱枠組を参考に社会人基礎力を評価した。その結果、世代間の信頼関係構築と地域特性の理解が促進された。学生は加齢に伴う変化の理解とフレイル予防の重要性、高齢者は学生と共に学ぶ事への感謝と日々生きる活力を得た。学生の社会人基礎力発達との関連は「働きかける力」、「課題発見力」、「傾聴力」に強く影響した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2025年問題の主演『高齢者』と『主役を支える担い手』の両者が共有する課題点を明らかにし学修するアクションリサーチによる介入プログラムの構築である。多世代との交流が希薄な学生と65歳以上のアクティブシニアとの実践的な協働学修は、相互理解と世代間の関係構築が促進される。継続的な実施により地域包括ケアシステムの共生社会において互いが構成員であり当事者同士であるという紐帯が形成されれば社会的意義は大きい。学生は将来、職場や地域における多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的能力の「働きかける力」、「課題発見力」、「傾聴力」の発達に関連し、高齢者は学生と共に学ぶ事へ感謝し、日々生きる活力を得た。

研究成果の概要(英文)：We created an educational program in which students and elderly people living in the same community learn together through an action research intervention, and explored the relationship between the program and the students' basic skills for working adults. Students learned about mutual understanding and trust formation, understanding of regional characteristics, and understanding of aging changes through lectures, group work, fieldwork, etc., every few months. As a result, intergenerational trust relationship building and understanding of regional characteristics were promoted. Students gained an understanding of the changes that accompany aging and the importance of preventing frailty, while the elderly gained an appreciation for learning together with the students and the energy to live everyday. In relation to the students' development of basic skills for working adults, there was a strong influence on their "ability to work," "ability to identify issues," and "ability to listen."

研究分野：基礎看護学

キーワード：地域包括ケアシステム アクションリサーチ 介入プログラム 協働学修 社会人基礎力

## 1. 研究開始当初の背景

### 1. 研究開始当初の背景

2011年の介護保険法改定で「地域包括ケアシステム」が定義づけられ、その後も2014年には「医療介護総合確保推進法」の制定、2016年診療報酬改定では、「医療機能の分化・強化、連携と地域包括ケアシステムの推進」を重点課題に挙げるなど、今後も保健医療福祉制度は、その実現に向け、具体的な内容になっていくことが予測される。「地域包括ケアシステム」の構築にあたり、キーパーソンとなるのは、看護師と言われ、その理由として、保健医療福祉分野で幅広く活躍し、クライアントに近い立場でニーズを把握し、ケアを実践することからコーディネーションの役割が期待されている。そのため、看護基礎教育においては、この期待に応える看護職育成が求められる。先行文献において、「地域包括ケアシステム」に関わる看護分野の研究は、訪問看護ステーションによる在宅看護の実践報告や地域包括支援センターを拠点としたまちづくりの実践報告は散見されるが、看護基礎教育関連の報告はまだ少なく、研究としては、現場の取り組みを中心としたものが占めている。しかし、「2025年問題」を目前に、「地域包括ケア」の担い手の育成は、急務である。一方、「地域包括ケアシステム」の担い手とは、保健医療福祉職のみならず地域社会全体の構成員であり、地域住民らによる自主的な「自助」「互助」を取り入れた介護予防などが、多く報告され、更に、地域の諸主体が、地域特性にあった仕組の構築が求められている。従って、その地域に隣接する大学機関も地域固有の資源として、それぞれの強みを活かし、積極的に参画すべきである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、学生と地域住民が地域包括ケアシステムのしくみの中で共に生きるための関係構築と共通する課題を明らかにし、その課題解決に向けて協働し学びあう教育プログラムの作成とその効果検証を図る。さらに、この協働学修を通じ、学生自身が地域共生社会で生き抜く基礎的な力（社会人基礎力）の発達に関係するかを明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究デザイン：アクションリサーチによる介入研究

アクションリサーチは、研究者が現場に入りその現場の人たちも研究に参加し、ともに研究作業を進め社会そのものに影響を与え変化をもたらす研究活動である<sup>1)</sup>。本研究では、介入プログラム参加者が研究参加者となり、協働的な研究作業に加わり実践していくことからこの研究方法を選択した。

### (2) 研究参加者

研究の趣旨に同意の得られたA大学看護学科、スポーツ科学科、健康科学科の学生とA大学所在地の近隣B町C地区在住の65歳以上の高齢者とした。高齢者のリクルート方法は、A大学スポーツ科学科が実施している高齢者を対象に筋力維持向上を目的としたトレーニング教室の参加者に対し、研究に関する説明を口頭と文書にて参加の可否を募った。また、B町地域包括支援センターの協力を得て、研究参加者募集のチラシを配布し、後日説明会を実施した。高齢者の参加条件として、日常生活に支障がなく介入プログラム（以下、協働ゼミ）開催場所まで自力で移動することができ、継続して参加可能であることとした。

### (3) 研究期間

2018年4月～2021年3月

### (4) 協働ゼミ内容および実施方法

本研究は、協働ゼミ内容をステップ1～3の3段階に分け、学生と高齢者の合計5～6名の班を編成し、少人数ゼミナール形式で実施した。まず学修目標を達成するために必要と思われる基礎的な知識を講義形式で学び（理論編）、その後、班構成メンバーでグループワークや実践的な学び（実践編）の組み合わせで行った。各班には教員を1名ずつ配置し、実践編のファシリテーター役割を担った。

ステップ1について：相互理解を目的に世代の異なる双方のライフヒストリーや価値観等の理解を促し、協働ゼミの実施対象地域であるB町C地区の地域特性を理解する内容構成とし、2日間のグループワークおよびフィールドワークを実施した。1日目は、導入編として、ゲームやディスカッションを取り入れ、チームビルディングを図った。さらに理論編として、高齢者が現状の身体機能を維持し生活するために必要な知識やフレイル予防に関する講義とB町の歴史や特徴等を理解する内容の講義を行った。

2日目は、実践編として、1日目に各班で作成した「フィールドワーク計画」を基に、B町C地区周辺を班全員が徒歩で状況を確認し、気づいた点などをメモや写真に記録させた。フィールド

ワークの地区は、協働ゼミ参加高齢者の居住地であるため班メンバー高齢者が地区の説明と案内役を担った。フィールドワーク所要時間はおよそ2時間30分、午前中に実施し、午後から班ごとにリフレクションにより学びを整理し、その内容を発表した。

ステップ2について：ステップ1終了から4か月後に1日間実施した。理論編では、高齢者の身体機能低下を理解するための加齢に伴う身体機能の変化に関する講義を実施した。さらに、実践編として班ごとに高齢者疑似体験装具を使用し身体変化のイメージを図った。高齢者疑似体験装具とは、加齢に伴う身体の変化を疑似体験するための装具である。関節可動域の減少を体験するために、重りやサポーターを装着し、身体の動きを制限させる。また、軍手を着用させることで、指先の細かな動きを制限する。さらに感覚器系の視覚・聴覚については、色付き眼鏡やゴーグル、イヤーマフを装着し、色別や視野、聴力の変化を疑似的に体験させるという高齢者疑似体験用教材である。各班の主に学生が着用し、段差のある場所や階段の昇降、エレベーター利用、財布から小銭を出し買い物行動などの実際を体験させた。班メンバーの高齢者は、自身の日常生活体験談を伝え、状況の補足を行った。その後、グループワーク（B町の地域特性と在住高齢者のニーズの確認・課題点の整理）を行い、その内容を発表した。

ステップ3について：ステップ2終了から8か月後に1日間実施した。これまでの取り組みから導き出されたアイデアの中から、実現可能な具体的方向性を見出し、その発信方法を探りまわし、アクションプランの作成をめざし、その一連の介入プロセスから学生の社会人基礎力の発達状況を評価した。

#### (5) 対象地域

B町はD県のほぼ中部に位置し、人口約1万4千人、高齢化率45.9%（2020年現在）<sup>2)</sup>である。B町人口の半分を占めるC地区は、首都圏50km圏内の好立地ベッドタウンとして1970年代から開発され、生産年齢人口が急増したが、現在は高齢化の進展が著しい。町内に鉄道はなく、電車を利用する場合は、隣接する市の駅を利用する。主要な移動手段は町内を巡る路線バスと町内や町外の大型病院や商業施設、近隣の駅への移動ができる「デマンドタクシー」である。

#### (6) データ収集方法

協働ゼミ各ステップの学修目標に沿って、その到達状況を以下の方法で収集した。

相互理解・信頼関係の構築、対象地区の関心

「良好なコミュニケーションと信頼関係の形成」および「対象地区の関心・理解」について「とてもそう思う～全く思わない」の5段階評定尺度による無記名自記式のアンケートを学生および高齢者を対象に実施し、定量データを収集した。フィールドワークによる対象地区の理解については、リフレクション終了後、気づいた点、気になった場所や感想などを班ごとに自由記述を求め、定性データを収集した。

加齢変化の理解

「高齢者の理解」について、講義や高齢者疑似体験装具を装着した感想や気づきについて学生および高齢者を対象に自由記述を求め、定性データを収集した。

社会人基礎力の3能力（12能力要素）

経済産業省が提唱する社会人基礎力の評価枠組みの発揮できた例（具体的な行動例）を参考に無記名自記式アンケートを実施した。12能力要素ごとの到達度を評価するために「発揮できなかった（1点）」、「何とか発揮できた（2点）」、「困難な状況でも発揮できた（3点）」の1～3の配点とした。さらに、12能力要素ごとの到達内容について自由記述を求め、質的データを収集した。この社会人基礎力の能力評価のデータは、学生のみを対象にステップ2および3の終了時に収集した。

#### (7) 分析方法

定量データについては、統計解析は統計解析ソフト IBM SPSS Ver.27.0 を使用し、記述統計および独立サンプルによる Mann-Whitney による U 検定を行った。優意確立は両側検定で  $p < 0.05$  とした。自由記述による定性データは、計量テキストマイニング分析ソフト KH Coder (Ver.3)<sup>3)</sup>を用い、統計的に分析した。テキストデータを形態素解析し、3回以上頻出語の抽出を行った。共起ネットワーク作成と階層的クラスター分析により、語と語の関連性を確認した。共起ネットワークによる語の関連性分析では、媒介中心性によるサブグラフの検出と Jaccard 係数を算出し、併せて KWIC コンコーダンスを用いて語の前後の文脈について原文確認を行った。さらにコレスポンデンス分析から社会人基礎力12の能力要素間の関係性および抽出語の関係性の確認を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 研究参加者の概要について

研究参加に同意の得られた学生は1～4年の18～41名（平均年齢19.7～21歳）、高齢者は5～7名（平均年齢72.2～75.6歳）であり、協働ゼミ実施時期により参加人数は異なる。初年度実施のステップ1の参加者が46人と最も多く、性別では女性の方が35人（76%）と男性11人（24%）よりも多かった。また、参加学生の学年は、1年生が最も多く（63.4%）、ついで3年（24.4%）、2年（12.2%）であった。

## (2) 相互理解・信頼関係の構築、対象地区の関心について

ステップ1を評価するために2日間同様のアンケートを実施した。世代の異なるゼミ参加者と「良好なコミュニケーションと信頼関係の形成」を問う項目で、「そう思う」および「とてもそう思う」と回答した割合は、1日目で89.1%、2日目で100%であった。また、「対象地区の関心と理解」を問う項目では、1日目95.1%、2日目97.6%であり、1日目よりも2日目の方が、よりコミュニケーションを図られ、信頼関係形成を実感し、対象地区の関心と理解が促進された。

## (3) 対象地区の課題について

フィールドワークとその後のグループワーク終了後の自由記述「振り返りシート」について、計量テキストマイニング分析を行った。その結果、フィールドワークに関連するテキストデータの総抽出語数は927語、異なり語は246語が抽出された。総抽出語のうち出現回数の多い上位5語は、「人」(13回)、「少ない」(12回)、「坂道」(12回)、「空き家」(10回)、「高齢」(10回)であった。次に、頻出語の共起性について、共起ネットワーク(サブグラフ検出)で確認した。共起ネットワークとは、出現パターンの共起の程度が強い語やコードを線で結んだネットワーク図である。強い共起関係ほど太い実線で示され、出現数の多い単語ほど大きな円で表現される。本研究のノードは、「空き家-雑草-坂道-高齢」を中心に「街灯-路地-増やす」と「多い-大変-状況-ゴミ-重要-町-買い物」が強く共起していた。さらに「人-対策」「公園-居場所」「少ない-防犯」「現状-確認」「住む-若者」が共起されており、バブルプロット計6つのネットワークを確認できた(図1)。さらに階層的クラスタ分析の結果、5つのクラスタが抽出された。以下、 $C_1$ はクラスタを構成する語、 $C_2$ はクラスタ前後の語を精読し内容を要約した。クラスタ1は「B町C地区の現状」で構成される。狭い路地に街灯がなく、空き家には雑草が繁っていること、坂道が多く高齢者には負担ではないかと実際にフィールドワークを行って観察した対象地区の現状が示された。クラスタ2は「B町C地区の課題点」で構成される。路地に街灯が少ないと気づいたことで町の防犯の必要性和防犯に関連する対策が少ないと現状を確認し、調べている。実際C地区を歩くことで坂道の多いことを把握したことでゴミ出しや買物が大変ではないかと状況に気づき、対象地区の課題点が示された。クラスタ3は「状況の整理と再利用の検討」で構成される。どの公園も利用者の姿はなく、遊具が錆びついていた。対象地区の生産年齢人口や子どもの数が減った。交通の便も悪い。しかし、数多い坂道を活用し、ランニングや自転車など運動に利用できないか、空き家を有効に利用活用できないかを模索していることが示された。クラスタ4は「対策のヒント(ヒト)」で構成される。このクラスタでは高齢者に関連する記述ではなく若者に向けた語が多い。若者の人口が減少していることに注目し、若者が利用しやすい施設整備や町の景観を良くし若者が住みやすい街づくりの必要性が示された。クラスタ5は「対策のヒント(居場所)」で構成される。子どもから高齢者まで幅広い世代が交流するために集まる居場所作りが対策のキーになるとし、利用されていない公園スペースの整備と再利用の検討が示された。フィールドワークで明らかにされた課題点は、「雑草が茂る空き家が多く、街灯が少ない為防犯対策が必要」、「坂道が多く」、「坂道が多い状況は、特に高齢者にとって、ゴミ出し・買い物に負担」、「利用されていない公園の再活用、町民の居場所づくり」、「若者が住みやすい対策が必要」であった。

## (4) 加齢変化の理解

ステップ2を評価するために、加齢に伴う身体機能の変化の理解について高齢者疑似体験装具を装着後、自由記述計による感想を高齢者および学生それぞれに求め、階層的クラスタ分析から両者の記述内容を比較した。高齢者の自由記述によるテキストデータの総抽出語数は446語、異なり語は189語が抽出された。階層的クラスタ分析は、3つのクラスタに分類された。クラスタ1は「老化を学ぶ」で構成される。今まで来た道はわかってもまだ歩いていないこれからの道はわからない。講義からこれからの道老化について勉強になった。学生が装着し、歩く様子を見てこのような老化を体験することは必要だ。しかし、実際の腰やひざが痛いことが伝わらないと実感した。クラスタ2は「老化の自覚」で構成される。まだ若く何でもできると思っていたが老化を感じるようになった。クラスタ3は「協働ゼミへの感謝」で構成される。若い学生の意見は勉強になると実感し、ありがとうと若い世代と一緒に勉強することへの感謝を表現していた。次に、学生の自由記述によるテキストデータの総抽出語数は450語、異なり語は177語が抽出され、3つのクラスタに分類された。クラスタ1は「老化の身体変化を知る」で構成される。初めて高齢者疑似体験装具を装着し階段を登る、筋肉低下の高齢者は大変だ。老廃物の蓄積と認知機能の低下について初めて知ることができた。クラスタ2は「段差が怖い」で構成される。足が上がりにくく、腕の関節運動も制限され、手すりがかみにくく階段が怖い。高齢者は階段が怖いと思う。クラスタ3は「老化の進行を防ぐ」で構成される。高齢者疑似体験から筋力体力の低下という老化の現状を理解した。転倒予防のために日ごろから筋力を低下させない運動がとても大切だと思うと体験から学修していた。

## (5) 社会人基礎力の評価

社会人基礎力を構成する12の能力要素得点

社会人基礎力を構成する12の能力要素を得点化し、ステップ2および3の比較を行うためにMann-WhitneyのU検定を行った。その結果、有意差のあった能力要素は「働きかける力」( $p < .041$ )、

「課題発見力」(p<.014), 「傾聴力」(p<.028)であった。

#### コレスポネンス分析

次に, 12 の能力要素ごとの到達内容の自由記述を求めたテキストデータについて, コレスポネンス分析を行い, KWIC コンコーダンスを用いた前後の語や文脈の原文確認を行った。その結果, X軸の成分1は原点より上部に「計画」を主体的にあるいは協力して「取り組んだ」, 「積極的に」, 「発信した」など具体的な「働きかけ」や行動の頻出語が位置している。また, Y軸の成分2は, 新しいことや知らなかった知識が「たくさん」, 「知れる」, 「自分の考えが」, 「出せる」, 「答えを出せた」等知識獲得に関連する抽出語が位置していた。

#### 共起ネットワーク

社会人基礎力に関連するテキストデータの総抽出語数は2132語, 異なり語は429語が抽出された。総抽出語のうち出現回数の多い上位5語は, 「意見」(42回), 「自分」(26回), 「理解」(13回), 「相手」(12回), 「考える」(11回), 「人」(11回), 「話」(11回), 「伝える」(11回)であった。次に, 頻出語の共起性について, 共起ネットワーク(サブグラフ検出)で確認した結果, バブルプロット計8つのネットワークを確認した。本研究のノードは, 「意見 - 自分 - 伝える - ストレス - 理解」であることから, 周りの人に率先して呼びかけ, 目的に向かって周囲の人を動かしていくという社会人基礎力12の要素の「働きかける力」, 「話 - 聞く - 課題 - 解決 - プロセス - 言葉遣い - 発言 - 見る - 目 - 言う - 知れる - 出せる - たくさん - 出る」という社会人基礎力12の要素「課題発見力」が強く共起していた。さらに「考え - 新しい - 協力 - 積極 - 目的 - 実行 - 提案 会話 - 他人 - プログラム - 見出せる」等, 社会人基礎力12の要素の「傾聴力」が共起されていた。以上のことから共起ネットワークは定量データの結果を支持し, 他者に働きかける力, 現状分析し課題を明確にする力, 相手の意見を丁寧に聴く力の発達に影響を与えた。本研究は, わが国において第一次ベビーブームが起こった時期の1947~1949年に生まれた団塊の世代と呼ばれる方々が, 75歳以上の後期高齢者となるいわゆる「2025年問題」の主演である『高齢者』と多世代との交流が希薄な時代に生きる『主役を支える担い手』が, 地域包括ケアシステムの共生社会において, 互いに学びあう協働的な学修の効果検証を図った。学生は, 高齢者への敬意と理解を深め, 今後, 職場や地域における多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的能力の「働きかける力」, 「課題発見力」, 「傾聴力」の発達に関連し, 高齢者は学生と共に学ぶ事へ感謝し, 日々生きる活力を得た。

#### 文献

- 1) 筒井真優美, 草柳浩子, 川名るり (2010). アクションリサーチ入門 看護研究の新たなステージへ。ライフサポート社。
- 2) 地域医療情報システム日本医師会 <https://jmap.jp/facilities/search> (2023年2月23日閲覧)
- 3) 樋口耕一. 社会調査のための計量テキスト分析 - 内容分析の継承と発展を目指して - . 第2版. 東京: ナカニシヤ出版. 2020.

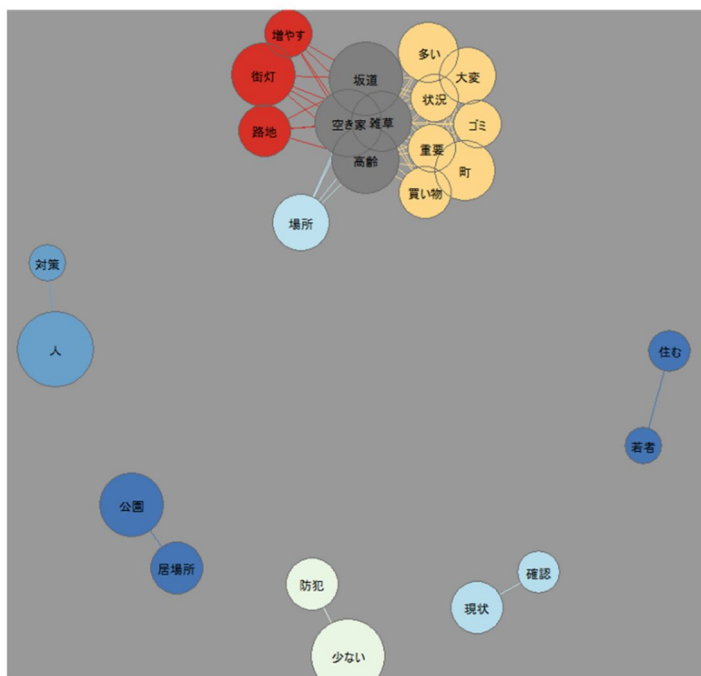


図1 フィールドワークの共起ネットワーク図

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	甲賀 ひとみ  (KOUGA Hitomi)  (00790388)	大東文化大学・スポーツ健康科学部・特任講師   (32636)	
研究分担者	琉子 友男  (RYUSHI Tomoo)  (70111440)	大東文化大学・スポーツ健康科学部・教授   (32636)	
研究分担者	杉森 裕樹  (SUGIMIRI Hiroki)  (20276554)	大東文化大学・スポーツ健康科学部・教授   (32636)	
研究分担者	田中 博史  (TANAKA Hiroshi)  (80311992)	大東文化大学・スポーツ健康科学部・教授   (32636)	
研究分担者	太田 眞  (OTA Makoto)  (60176899)	大東文化大学・スポーツ健康科学部・教授   (32636)	
研究分担者	須佐 公子  (SUSA kimiko)  (90383116)	大東文化大学・スポーツ健康科学部・准教授   (32636)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	奥平 寛奈  (OKUDAIRA Hirona)  (90756785)	大東文化大学・スポーツ健康科学部・講師    (32636)	
研究分担者	郷原 志保  (GOHARA Shiho)  (90757527)	大東文化大学・スポーツ健康科学部・特任助手    (32636)	
研究分担者	高瀬 寛子  (TAKASE Hiroko)  (80827981)	大東文化大学・スポーツ健康科学部・助手    (32636)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関